

川嶋昭二：海藻標本で描いた絵

Shoji Kawashima: Picture painted by dried specimens of seaweed

海藻標本といえば藻類の研究者や夏休みの宿題に小・中学生が作るもので、一般には縁のないものと私たちは思いがちである。ところが、そんな学問や勉強とは無縁の仕事しながら海藻に魅せられ、その乾燥標本で絵を「描く」趣味に熱中している人がいる。

その人は渡辺勇さん（68才）といい、北海道大学の学生寮（旧恵迪寮）のポイラーマンをしておられるが、同じキャンパスの中で世界的な海藻研究が盛んに行なわれていることなど夢にも知らず、また海藻の名もコンブ、ワカメ、ノリくらいしか知らなかったという全くの素人の方である。ある日、その渡辺さんに絵を見せて頂き、話を伺った。

渡辺さんの海藻との付き合いは函館で働いていた4年前のある日、海辺に出かけて打ち上げられた色とりどりの海藻の美しい姿、形に接し目を見張ったときから始まった。それから何度か海辺で海藻を拾い、自己流で乾燥標本作りに熱中していたが、その標本を眺めているうちに、これは風景画の素材に使いそうだと思いついたという。

2年前に札幌に帰り今の仕事についたが、1991年の夏には1か月をかけて北陸、山陰地方から北九州、四国そして東海、関東各地を車で廻りたくさんの海藻を採集してきた。その成果は何冊かのファイルに納まり、また塩蔵して保存されている。

渡辺さんの絵は30×40 cmほどの四季おりおりの風景画で、背景の山や湖あるいは空などは油絵の具で描いているが、それに用意したたくさんの乾燥標本の中から樹木や草になりそうなものを選んで張り付けてある。近景の大きな木は太い幹と枝葉の部分をそれぞれ違う種類の標本を巧みに組み合わせ、木それぞれの感じや遠近による表現にも海藻の特徴をうまく利用する工夫をしている。使われている海藻はマクサ、オバクサ、ハリガネ、スギノリ、オキツノリ、ホンダワラ類のような樹枝状のものが多く。

ただ、絵には形のほかに季節にふさわしい色彩が必要であるが、標本自体の色だけでは特別な表現以外はどうしても不足する。それで渡辺さんは乾燥標本にあらかじめ緑、赤、黄、白など季節に合わせたいくつか

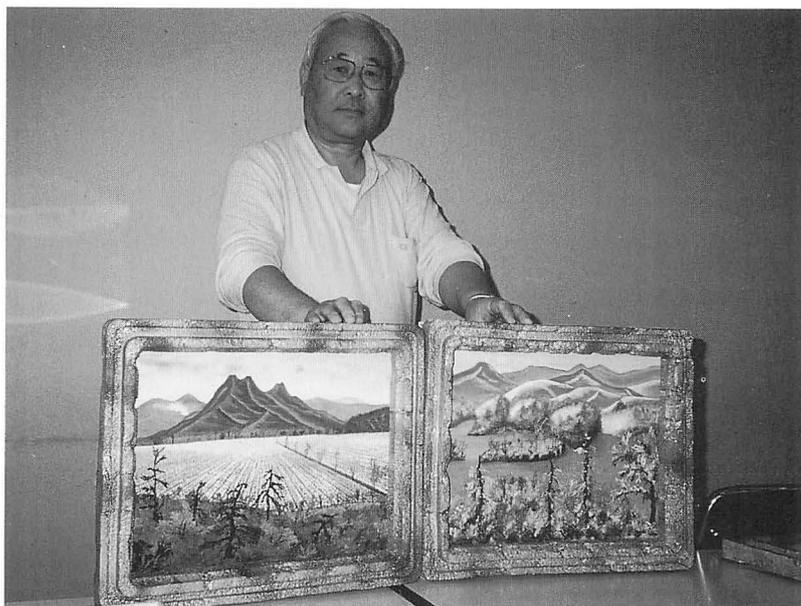


Fig. 1. Mr. Isamu Watanabe and his handmade pictures. The trees and grasses in the picture are expressed by dried and colored specimens of various kinds of seaweed.

の色を絵の具で塗ってたくさん保存しておき、状況にあわせてこれらを使う工夫をしている。

ところで、私たちの常識では海藻標本は台紙上で乾燥するものであるが、渡辺さんはそのことを知らず全くの自己流で台紙なしの標本を作っていた。このことが、かえって標本を絵を「描く」素材として自由に利用するという発想を生み出したのであって、もし常識通りの海藻標本を作っていたら単なる標本マニアで満足していたかもしれない。

渡辺さんの絵は、本人も言われるようにまだまだ習

作の段階であり、もっとたくさんの海藻を利用すれば一層楽しい絵になりそうである。さらにその手法を利用すれば奥行のある芸術的作品を作ることもできるだろう。

ともあれ、その絵を見せられて私は研究者ではちょっと思い付かない海藻の楽しみ方に新鮮さを覚え、いささか虚をつかれた感じさえた。子供達の情操教育などにも取り入れられるだろうし、海藻の勉強でもこんな遊び心から入ったら楽しくなるだろう。

(041 函館市日吉町4-29-15)